

遙かな平壤への道

ピョンヤン(平壤)ホテルに落着き、二重扉の窓を開くと、柳の木をしながらかすめて通う大同江の川風が全身にしみわたるように流れた。

日本との時差はない。しかし夕暮れは一時三十分位遅れていて、十月十五日の午後五時を回ったのに、対岸左手にそそり立ったチュチェ(主体)思想の塔には、まだ高い太陽がまともに映えていた。

高さ百七十メートル、大理石で烽火を形造った塔は金日成主席が指導するチュチェ思想を現わしたもので、朝鮮人民の精神のシンボルである。

幾度びもの戦禍にうち砕かれた焼土から、都市を復興・再建し、社会主義革命を成しとげた朝鮮人民の一つの自信表明であろう。その自信のほどは空港からホテルまで、わずか三十分弱の道のりの中でも充分にうかがえた。

空港を出てなだらかな丘陵のつらなる田園を十五分ほど走ると巨大な凱旋門をくぐり市街地に入らる。千里馬の大きなはばたきの像が、一日に千里でも走り抜ける朝鮮発展の気概を現わし、それに並ぶように金日成主席像が二十・五メートルの巨像で丘の上に現われる。右手を高くかざし、人民の進路を指示している姿である。革命博物館前から、勝利通りへ入ると一階が商店になった高いアパ

ートが並ぶ住居地区に変わった。ほどなく、入母屋式青瓦の人民大学習堂を正面にどっかりと位置させた金日成広場を通過し、古風な平壤劇場の脇を曲ってピョンヤンホテルへ入った。

町はバスやトロリーバスがづらなっており、街路樹の立ち並ぶ歩道には軍服や人民服・学生などの制服姿の人びとが多い。しかし若い女性には色どりの豊かなブラウス

いよ、北朝鮮・朝鮮民主主義人民共和国の生の姿が見え始めて来たのだ、と思った。

私はいま平壤にいるのだ、と実感し始める。とよく来たものよ、との思いがわいた。

日朝文化交流協会の誘いで、作家の佐木隆三氏(団長)と文藝春秋の出版部次長岡崎正隆氏(秘書長)と私という三人の友好団を組

それにしても出掛けるまでの手続きには時間がかかった。北朝鮮から招待状をもらうと外務省で特別な承認を得なければならないのである。その許可を経てパスポートの申請であるが、北朝鮮へ中国を経由して出掛けるだけに有効である、と書き込まれた一回旅券になる。この二つの経過に思いがけない時間をとられた。あけく最終的にパスポートは出される

が、招待日には間に合わないことが分って来た。結局、日時短縮には政治関係者の力を借りなければならなかった。われわれの意には反することだったが、行政の限界を見たようなものでやむを得なかった。そうまでしてはまだ中国大使館でビザを受ける日時に不足が生じた。結局は中国側の寛大な処置で、十月十四日午前中に大使館に出向きビザの発給を受け、午後の飛行機に間に合うというキワどいことになった。

私は、搭乗手続きを済ませた箱崎から、会社と自宅に「本当に行けることになりました」と「デンワ」を入れ、どうにか旅人の心に納まったものである。国交のないことの意味をじっくりと思い知らされた具合であった。

今日は！ 朝鮮

アンニョンハシムニカ

本は人民総インテリ化への糧

大橋祥宏(おおはし・よしひろ)



〈写真〉平壤空港に少女の出迎えを受ける(右から)私と佐木、岡崎の両氏

やセーターにスカート姿で、花のように流れにのっていた。時々頭に大きな荷物を軽々とのせ、大きく手を振って歩く女性も見え、旧い朝鮮の伝統、習慣の健在をみた思いもある。

平壤は公園の中に都市があると いわれる。手入れの行きとどいた花や緑は切れることなく続いて、暑く感じた秋の日射しをいっぱいに受けていた。

出迎えの車窓から見えてくるのは、平穩で安定した民心までが映されたような光景であった。いよ

日本商品の国交

花ざかり

ところで平壤のホテルに納まって、あたりを見回し、少しずつ動き始めると、実に奇妙なことにわくわくした。まずはテレビ、ラジオ、冷蔵庫、クーラー、電話など電気製品のほとんどが日本製品なのである。コーヒースタンドの器具もBGM装置もそうだが、その売店に並んでいるのがサントリーウイスキー、大関、白鷹の日本酒。缶ビールはキリン、アサヒ、サッポロ、カップラーメン、キツネうどん、ジュース類は自動販売機で日本のコインで出るものもある。妙香山や開城の地方に出ても、Tシャツ、モモヒキなどの衣類あり、洗剤がある。カメラ、フィルム、電卓にチョコレート、センペイなどの菓子、みそ汁、ふくじん漬、たくあん類もあつてないものはないということを知られた。

新装の高麗ホテルは電球からエレベーター、エスカレーターが日本製品で、その近くには日本のデパートが名前を変え、合併百貨店を出し、日本式サービスで固めていたし、江戸前寿司屋も普通江のほとりにあった。

乗用車は西ドイツのベンツとBMWが主流であるが、それでも日本のメーカーのほとんどの車を見かけている。病院の医療機器、施設も同様で、近々にはFM放送局が日本システムで誕生する話もあり、日本商品の氾濫状態ともいえ

た。ここでないものといえ、日本の書籍類や映画、レコード、カセットなどのソフト類であった。私はここでまた「国交」とはいいかなるものなのかわからなくなっていた。国交のない国へ出かけることでは、文化の負う役割は大きいはずだぞ...と思っていたが、どうだろう、遠回りさせられて、やっとたどり着いてみると、文化は一番遅れて到着しました、といった有様であった。

遠回りといえ、東京—平壤間は飛行機で二時間ほどの距離である、それを中国を経由して入るのだから大分遠回りになる。更には北京の朝鮮大使館でビザを受けとらねばならないから一泊しなければならなくなる。私たちも十五日の午前、そちらへ回ったが、実はここでもちょっと驚くことがあった。

大使館の待合室には日本人商社マンが四・五人位のグループで三組待っていたのである。その一組のリーダー格らしい若者に話しかけてみた。彼は非鉄金属関係の仕事で朝鮮のあちらこちらを回っているといった。今回も三か月位滞在するのだが、出入国は何度もして、日本政府も何の文句もなくパスポートを出してくれるのだそう。

「わたしらはみなさんみたいな知的なことじゃないんです。商売で、掛け引きですからやられんように：厳しいですわ、通訳などつこうていられまへん」関西弁でまくしたてる元気な人だった。中国

語と朝鮮語をあやつり、館員とも馴染みのようだった。出発前朝鮮総連の人に、年間何人位の日本人が朝鮮へ出かけているのかたずねてみたが、総連で手続きをする組が五十以上で、直接政府機関でやるものもあるからすぐにはわからないといわれたことを思った。

本に熱している人民

十月十六日、平壤での二日目が始まり、いよいよ本格的な朝鮮国の見聞が開始された。

見学の初めは、本にかかわりの深い人民大学習室からだ。ここは全社会的インテリ化を目ざすこの国の総合センターで、書籍三千万冊という世界一の収蔵能力を容する大図書館から成り立っている。現在の蔵書はまだその半分に

も充たない程度らしいが、一日に一万二千余名の読書人を受け入れることができるという。大学生を中心に、沢山の入館者がいろいろな部屋で読書や外国語学習、技術指導の視聴覚セミナーなどを開いて励んでいた。レファレンスサービスもするが、個人的な読書相談室も開設されている。一九八二年四月四日開館したが、その頃、日本の出版界にも圖書の寄贈依頼があった。私の記憶では沢山の社が協力したが、ことに小学館や六法出版社が沢山寄贈されたことを思い出し、その本をさがしてみた。部門別に仕分けられていて、医書関係の書庫に案内されたが、閉架式で日本の医学書は大量にあった

ものの求める本は見つからなかった。

ところで今回の訪朝に際し、私は朝鮮が自然科学書に渴望していると聞いたので、親しい方がたから本の寄贈を受け土産とした。二、十五・六社から寄せられた本は、各社の目録もあったが、百点を越える大量のものとなった。受け入れ先の対外文化連絡協議会を始め、人民大学習室や博物館など、行く先々で本に関してはことばを改めてのお礼をいわれ、大変感謝された。

金静心女史は、私たちに終始付いてくれた通訳の一人だが、ご主人が技術者ということで寄贈本の



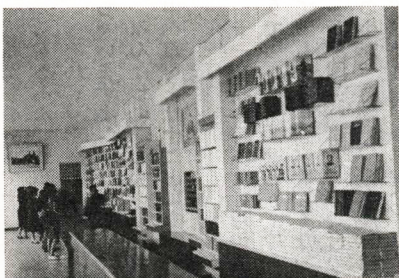
＜写真＞人民大学習室の図書展

書名から目ぼしいところを一所懸命写しとり、学習室に納まったらいち早く読ませたいのだとい、また出版目録を丁寧にめくってはこうした本の購入はどうしたらよいのか：とたずねて来た。とにかく本への関心は高い国である。まだマスメディアが多様化してない国だから、といってしまうえばそう

でもあろうが、小学生が活字だけの部厚い本に熱中していたり、大同江に釣糸を垂れる青年が本に夢中になっているような、本に熱している姿はいくらでもみられた。

朝鮮は十一年の義務教育制で、近い将来には大学までを義務制にす。全人民のインテリ化を目ざして、学ぶことから国づくりをすすめているわけで、この国では、本が重要な糧なのである。

人民大学習室では、折しも国内図書展が開かれていた。会場は神田の三省堂書店の四フロア分位を拡げたような広々としたところで、金日成主席著作全集や金正日書記の選集などを中心に、技術



＜写真＞街の小さな書店

書、科学書、文芸書、児童書、教科書などが所せましと並べられていた。更には「李朝実記」など歴史書の復刻なども加えて見事な量を見せていた。

本の求められ方は、その後書店に寄って様子を見ると、大きい総合書店はあるが、一般的には住宅地区に大人と子供とは区別した専

門店形式をとって小さく開業されていた。私が立ち寄った店は二フロクになって、右手が子どもの本で手に触れられるが、左手の大人の方はカウンターで仕切られ、直接本を手に出るなかった。本を買いに来ている女性に声を掛けてみると金日成主席夫人の伝記を買ったのだといった。風呂敷で何十冊もまとめて買う人が何組か並んでいたが、職場の図書室のものや同僚から頼まれて来たとのことだった。

図書室は職場や学校に必ず備わっている、貸し出しもさかんのようである。街中にも二・三卓のテーブルを置いた小さな図書館を見つけたが、貸し出しが主なようだった。

乏しい出版の交流

出版関係者と話合う機会は、八日目の午前中、外国文総合出版社の訪問という形で行なわれた。

出版社は外国文総合出版社の他、労働党出版社、労働新聞社、科学・百科事典出版社、工業出版社、農業出版社、金星青年出版社(青年向図書と児童図書)、勤労者団体出版社、文芸出版社、祖国社などがあるが、それぞれの機能で縦割りにされ、出版社相互の連絡はないようだった。

外国文総合出版社では、副社長李金錫氏と部長呉義煥氏が話をしてくれた。

主な出版は、金日成著作集や全集を始め、朝鮮の政治、経済、文

芸、一般などの図書を世界八か国語(日本語、中国語、ロシア語、英語、仏語、スペイン語、ドイツ語、アラブ語)で発行する対外的な総合出版社で、八百名の印刷工場も付設されていた。書籍部門は百五十四名で、雑誌は『朝鮮画報』が七十名、『今日の朝鮮』が四か国語七十名、『ピョンヤンタイムス』紙は英仏二か国語で六十名の陣容だという。その他、外国の資料を翻訳する業務や大学卒の翻訳専門者の養成所も擁していた。この社で日本語の専門員は約五十名のことだった。

私の方からは日本の出版事情を説明したあと、出版人同志の交流の意味や商業取引上のルール、著作権問題などを説明した。更には自然科学系ばかりではなく、人文、社会科学系書籍の交流、学術研究や調査の交流など希望を述べ、力を尽して欲しいと申し入れた。私が発するまでにいろいろと託された声を集約したつもりであった。

私はいくつかしたむきは、必要に応じて各所で発言を重ねた。歴史博物館長朴昌徳氏も初対面であったが、わざわざホテルまで訪ねてみえられ、先頃、大阪の阪急デパートで開催した高句麗壁画展の成功を喜びながら、来日したときの印象を語り、文化交流に強い賛意を示された。

対外文化協会の関係者は、いままでは訪朝した出版人の少なすぎたことを語った。未来社社長西谷能雄氏、雄山閣出版社社長長坂一雄

氏、岩波書店社長緑川亨氏、『世界』編集長安江良介氏、三省堂企画社長角田栄一氏、影書房社長松本昌次氏、それに読売新聞社出版局の人たちの名前が対文協副委員長迎承徳先生の口からすらすらと出たのには驚いたが、訪朝出版人は十数年でそんなものらしい。しかも逆の訪日となれば皆無に近いのではないだろうか。とにかく今回の訪朝は、日本の出版業界というまとまった対象のあることを強く意識してくれたようで、対文協として日本の出版人を招きたいと発言し始めた。私は、遅ればせの文化の登場ですが、友好の本物の登場ですぞと念おしをしておい

わがままな旅人

対文協副局長の金三元氏は終始私達のもてなしに付添ってくれた人であるが、どうぞ、ご希望は遠慮なく出して下さいと言った。



＜写真＞「よど号」田宮高麗氏(右から2人目)と小西隆裕氏(左から2人目)＜アイススケートセンター前＞

われわれは、そのことを額面通りに受けて、遠慮なしにいろいろお願いを出した。

家庭訪問では、金副局長宅を訪ねたいと申し入れ、金さんをあわてさせた。結局は、金副局長の女友達の家に寄ることになったが、その訪問も出先で急に決めたので、今度はその家庭であわてたことだった。

だいたい、こんな調子でやったのである。それにしてもそのほとんどを聞き入れてもらえたのだから、われわれとしても恐縮したが、お陰で予想以上の成果をあげることにしたのである。

ただ、佐木団長のお願いが一つだけ聞き入れてもらえなかった。

佐木さんは昭和十二年、朝鮮の咸境北道に生まれ、四歳までを過ごした。それで、何を置いてもその地へ行きたいと申し出たのである。しかし日程の上でムリだということになり、「もう一度来て下さい。そのときは実現できるでしょう」と、対文協の人たちも申訳な

執拗にこたばを代えて頼んだ佐木さんだったが、きちんとことわられると、自分のわがまままでした、と詫びて次の機会の実現を依頼するのだった。

通訳の金静心女史は、われわれの呼吸がわかって、気心が知れると友達同士となって、ザックバランスに向うことも切り込んで来た。

「まったく、つきからつぎにいろいろ言われるので、困りましたよ」と笑い、われわれをいまま

にないタイプの訪問者だとい

街の食堂で食事をしたい、と言え。またですか、そう言われたって、こっちにも接待の予算があるんですよ」と白状する。

「なんだ、そんな心配してるのかい、そんなのはこっちでもたせてもらうから、案内してよ」

「私たちの分もですよ」

「もちろん、まかせてよ」

「それじゃ、高いものを注文しちゃいますよ」

みんなして、大笑いしながら街中へ車をとばすことになった。

十一日間の滞在は日時があるようでも、次第にせわしなくなっていく。もつと時間が欲しくなっていた。国会議事堂、万景台の主席の生家、博物館、産業展示館、学校、幼稚園、少年宮、少年夜宮所、病院、地下鉄、ダム、遊園地。劇場は六千人の観客を容ると同時に出演者が五千人という大舞台の観劇、映画、サーカス、妙香山登山、大蔵経のある普賢寺、サウナ、街の食堂、勤務帰りに若者が寄る居酒屋、家庭訪問と盛り沢山であった。

ところで、意見を述べるのも質問も佐木団長以下、われわれ三人は三様のままでいくことにし、いつでも勝手に出した。しかし、呼吸は実にうまく合って、お互い

得るところは多かった。その気軽な質問の一つは、金正日書記が後継者になられるが、社会主義国家の世襲はおかしくないか」と、

やったものである。祖父も革命家で、革命一家の血筋を引き、主席の意志を引きついで、このような国家建設の仕事をしていると、正しく理解して欲しいことで、一所懸命に説明をし映画もみせ、本をホテルの机にそろえてくれた。後継者として、書記を迎えることは民心の中でほぼ完了していると思えた。税金は一切廃した国である。世界広しといえど税のないのは共和国のみで、自分らが納めないのに、教育や治療は無料だし、

主席や書記からいろいろ頂いている素晴らしい国である。希望と喜びを満身で受けとめているのである。何しろ、人間は努力をおこなわなければ成らないことではないという風であって、一千八百万の人民が丸丸となって国づくりに励む最中である。西の南浦海岸では二百万町歩の干拓事業をすすめる、間もなく地図の形が変わるのだという話も実に誇りから素晴らしい熱を帯びていた。

こうした状況の反面、板門店での38度線を見たのは、軍事的な緊張そのまゝの姿で、もう一つの忘れてはならないこの国、この民族の厳しい現実をみせられたことだった。38度線という人間が地球の上に引いた一本の白い線を見、それをはさんで武装した国連軍兵(米軍人)と対峙する位置に立つたとき、ここが戦後日本の経済復興の原点ではあるが、同時に、今日なお、日本の経済繁栄が、この線に集約された緊張で支えられているのだと思ひ、もし、朝鮮半島

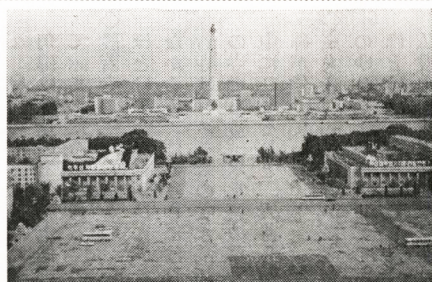
が社会主義国で統一されていたら、是非は別として、日本は元寇の役の体制に似た緊張の構図で描かれ、今日とは変わっているのだからと認識せざるを得なかった。

迷走「よど号」の

メンバー

旅の途中で二度、「よど号」のメンバーと会った。初めは二十一日の夜で、われわれのホテルに小西隆裕、若林盛亮、赤木志郎の三氏が訪ねて来た。

昭和四十五年当時、新左翼として権力にやられっぱなしで、逮捕も出、活動が出来なくなっていたので、いっばつハナを明かしてやっていた。それが日航機ハイジャックになった。日本人民には迷惑をかけたが、方法的に間違っているはいなかった。亡命ではないので、すぐ帰るつもりだった。軍事教練を申し出たが北朝鮮にはとり合ってもらえず、見学や観光などばかりさせられた。帰るため、日本海を日本に近づいたら泳ぎきるつもりで、長いこと水泳の練習を真剣にやった。その後朝鮮語をマスターし、いまは翻訳や日本語講師(通訳)をつとめ過分ともいえる報酬を得ている。一度だけリビアへも大会があつて小西、若林の二人で出かけたこともあります。報道関係や政治関係者でないわれわれには気軽に接し得るのか、つけ入った質問でも笑いながら答えた。革命などとはかけ離れたような他愛ない無邪気さみせ、出前であつた寿司をノドを鳴らした



＜写真＞平壤一景・金日成広場からの大同江とチュチェ思想塔

がらつまんで、三時間余も話し込んでいった。

二度目は二十四日の昼時、街中の焼肉店清流館で田宮高磨氏と小西氏に先日の答礼の意味でごちそうになることになった。

「日本に帰りたい」との気持は先日と同じ話で、田宮氏自身の口からも「政府に頭を下げてまでは帰ろうとは思わぬが」帰って法廷闘争になる場合の覚悟は聞いた。日本政府の対応にさぐりを入れ、田宮、小西、若林の三氏あたりが全面的に罪をかぶる体制としていられるように私は感じた。季刊雑誌「日本を考える」を朝鮮で印刷し、日本で発売しているが、書くこともこのごろではなくなつて、「と苦笑いしていた。次の予定があり、小一時間で別れたが、田宮氏の高笑い始終豪快でもあり、虚しくもあつて、人間の哀しさを見たように思つた。彼らは「われわれほどの革命家はいないと思つていたのに、この国へ来て

みたら、農民の一人ひとりがつもつと立派な革命家であることを知らされた」といい、連合赤軍のような無惨な形にならなくてよかった」と、ぼつり、ぼつりと反省をもらした。私としては、彼らが一日でも早く帰国し、刑に服した人間として平和・友好のために尽してもらいたいものだと思つた。

暖かい日射しの中で別れぎわ、私はポケットに入れていた、小さな玩具のケン玉を笑いながら差し出すと、田宮氏が、「オッ、ケン玉、これは面白いじゃないか」と喜んで受けとった。

旅情豊かな

焼きハマグリ

二十五日、いよいよ平壤を離れることになった。十一日間の滞在中に、木々は大部分色づき、早朝の街は落葉を掃く人が沢山出るようになっていた。十一月には雪もちらつき始めて冬を迎えるのだ。しかしいまの平壤は冬に閉じ込められることはないらしい。全家庭の床下には温水暖房が張りめぐらされて、寒さ知らずではある。しかし、それよりも人々の心には明日に向つての信頼と希望が燃えさかづいて、寒くて暗い冬というものは遠い過去のものになったのである。対外文化協会の通訳の一人

である李河進君は大学を出て間もないがしっかりと日本語を使い、「私たちが努力すれば出来ないことはないのです。日本語を勉強することは、過去をみて、いまわしい日帝時代のことばで、率先して学ぶ外国語ではないと思いがちです。しかし、私はこれからの朝・日の関係はものすごく発展しなければならぬと思ひたつて、迷うことなく学びました」と言明してくれた。

たという。佐木さんはしきりに「平壤の焼きハマグリ」を連呼しながら酒を汲んだが、私もこの地の風土、風物をおおわせるものに出会ったことと少なからず味わい深い思いにひたされられた。旅人は街へ出てくれば通じないといつたら。しかもハングル文字は一字も読めなくて、心を解き放つところがなかった。それも緊張の要因であつたろうか。

私は、こうした若者のあることが無性に嬉しかったし、寒さにも国際環境にも閉じ込められる国ではないと思えた。

旅は終わった。旅の終りでは、ある種の旅情：愁いにも似た気持を私はいつも味わうのであるが、不思議と今度はわかなかった。目的が違ふから：といえそうでもあるが、全体に緊張していたのかとも思つた。

それでも緊張のほどけた時間の一つ、二つはないではなかった。ピョンヤンホテルの片隅に焼きハマグリのコナーがあつたのはその一つである。男の大きなにぎりこぶしほどもあるハマグリを目の前で焼いて、日本酒をふりかけて出してくれるのである。南浦海岸で採れる生きのいい肉厚の美味な貝なのだ。

佐木隆三さんは昭和十六年十二月九日、戦争勃発の翌日、日本に引きあげたのである。その佐木一家が平壤を通るとき、この焼きハマグリ売り人の声を寒空で聞いたという。



結婚式・披露宴は、日本出版クラブ会館へ！

受付は
(207) 六一二